

Title	山岳信仰・修験道と地名
Sub Title	Place-names in mountain worship and Shugendo
Author	宮家, 準(Miyake, Hitoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1996
Jtitle	哲學 No.100 (1996. 3) ,p.185- 211
JaLC DOI	
Abstract	Many of the place-names given to sacred sites on Shugendo mountains are illustrative of Shugendo theory and practice. Thus Shugendo may be understood through an examination of these place-names. In the name of a sacred mountain of Shugendo, the final character (山) is read-sen (rather than the usual -san or -yama) in order to indicate that a mountain ascetic (仙人, sennin) has undergone ascetic practice there; this is the case with the principal center of Shugendo, Kinbu-sen in Yoshino, Nara Prefecture. Kinbu-sen is also called Kane-no-mitake; the character for -take (a large stony peak) is frequently used in the names of the sacred mountains of Shugendo. Mountains with names such as Fudo-sen (from the Sk. Acalanatha) and Dainichi-ga-take (from the Sk. Mahavairocana) express objects of worship in Shugendo, while others, such as Mandara-sen ("Mount Mandala") and Misen (i.e. [Shu] misen, Sk. Sumeru) are themselves expressions of the cosmos. Shugendo practice at these sacred mountains consists of the ritual cleansing of body and mind at the Harai-kawa ("Purification River") at the foot of the mountain, the ascension of the Nobori-iwa ("Climbing Rock"), performing penitence for one's wrongs while being held upside-down over a precipice named Nozoki ("Viewing"), and crawling through a crevice with the name Tainai-kuguri ("Passing-through-the-Womb"). Shugendo practice may also be undertaken at places that represent other realms, such as Jigokudani ("Hell Valley") and Jodo-ga-hara ("Pure-land Field"). The names of these mountains and mountain sites indicate that to Shugendo practitioners they are places in which deities and spirits dwell and where, through religious practice, they will be reborn as buddhas.
Notes	100集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000100-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山岳信仰・修験道と地名

— 宮 家

準* —

Place-names in Mountain Worship and Shugendo

Hitoshi Miyake

Many of the place-names given to sacred sites on Shugendo mountains are illustrative of Shugendo theory and practice. Thus Shugendo may be understood through an examination of these place-names. In the name of a sacred mountain of Shugendo, the final character (山) is read *sen* (rather than the usual *-san* or *-yama*) in order to indicate that a mountain ascetic (仙人, *sennin*) has undergone ascetic practice there; this is the case with the principal center of Shugendo, Kinbu-*sen* in Yoshino, Nara Prefecture. Kinbu-*sen* is also called Kane-no-mitake; the character for *-take* (a large stony peak) is frequently used in the names of the sacred mountains of Shugendo. Mountains with names such as Fudo-*sen* (from the Sk. Acalanatha) and Dai-nichi-ga-take (from the Sk. Mahavairocana) express objects of worship in Shugendo, while others, such as Mandara-*sen* ("Mount Mandala") and Misen (i.e. [Shu] misen, Sk. Sumeru) are themselves expressions of the cosmos.

Shugendo practice at these sacred mountains consists of the ritual cleansing of body and mind at the Harai-kawa ("Purification River") at the foot of the mountain, the ascension of the Nobori-iwa ("Climbing Rock"), performing penitence for one's wrongs while being held upside-down over a precipice named Nozoki ("Viewing"), and crawling through a crevice with the name Tainai-kuguri ("Passing-through-the-Womb"). Shugendo practice may also be undertaken at places that represent other realms, such as Jigokudani ("Hell Valley") and Jodo-ga-hara ("Pureland Field"). The names of these mountains and mountain sites indicate that to Shugendo practitioners they are places in which deities and spirits dwell and where, through religious practice, they will be reborn as buddhas.

* 慶應義塾大学文学部教授 (社会学)

序

これ迄山岳信仰や修験道の地名に関する研究は、町や村の地名の研究に比してさしてなされてこなかった。そのうえほとんどが地理学、民俗学、山岳の研究者の手になるものである。地理学の分野では、昭和32年に鏡味完二が『日本地名学』の中で、山名の語尾に付される岳、森、峰の頻度や分布、富士山、峠、滝の地名をとりあげている¹⁾。その後昭和51年には松尾俊郎が『日本の地名——歴史のなかの風土』で地図の丹念な分析にもとづいて崖・山中の平坦地など山の地形と地名に関する分析を試みている²⁾。

民俗学からの地名研究の嚆矢は昭和11年に刊行された柳田国男の『地名の研究』である³⁾。ただ本書には山の地名については、タタラ、矢立峠などが断片的にふれられているのみである。なお、柳田国男と倉田一郎の共編になる『分類山村語彙』には山の地形・山の信仰に関する語彙があげられている⁴⁾。この頃高橋文太郎は日本山岳会の支援のもとに、山岳語彙の採集を試みている。その採集項目は『山岳語彙採集帳』や「山岳語彙の採集」によると、地形・天象・動植物・牧畜・登山用具・登山・山中の生活・特殊用語（山言葉など）の各分野にわたっている。また採集結果の一部は『山岳語彙蒐集報告』(1)にまとめられている⁵⁾。この報告は各項目別に語彙と採集地をあげたものであるが、高橋はさらに研究を進め『旅と伝説』の15巻に「山と地形のことば」(1)-(5)を連載している⁶⁾。角田吉夫も昭和11年に山岳講座に山岳語彙を収録している⁷⁾。

一方昭和14年に山村民俗の会を発足させて、機関紙『あしなか』を発刊した岩科小一郎は、昭和15年に『山岳語彙』を刊行した。本書には350項目、850語の山岳語彙が五十音順に配列されている⁸⁾。ところで山岳語彙を考える際、山名や各山の概要は重要な問題であるが、これに応えるものに、明治39年に高頭式が編集した『日本山嶽志』（博文館）があ

る。その後昭和53年に刊行された徳久球雄編『コンサイス日本山名辞典』（三省堂）では20万分の1の地勢図をもとにした約13,000の山名を簡単に解説している⁹⁾。またとりあげた山の数はいくつか少ないが、桜井徳太郎監修の『歴史の山100選』（秋田書店、昭和49年）も主要霊山の歴史や伝説を知るのに便利である。なお修験霊山の伝承をあげたものには、五来重編『修験道の伝承文化』（山岳宗教史研究叢書16 名著出版 昭和56年）がある。本書の巻頭の五来重「修験道伝承論」には、修験道の伝承の具体例が、縁起、開創者、験者・山伏、行場、入峰修行、遺跡、山岳霊物、山中他界、海の修験、昔話、その他の項目別に列挙されている。このうち行場、遺跡、山中他界、海の修験に関するものには、山中の霊地の地名となっているものも少なからず認められる¹⁰⁾。この他山岳に見られる金属地名をとりあげたものに、谷有二『日本山岳伝承の謎——山名にさぐる朝鮮ルーツと金属文化』（未来社 昭和58年）がある。

以上山岳語彙、山岳名などに関する先学の研究を紹介した。ただこれらは地理学、民俗学、山岳研究者のもので、地名の分布・地形・歴史・伝承・生活と関係づけての語源の推測に重点が置かれている。けれども日本の民俗宗教では山岳は俗なる日常生活が営まれる里とは異質の神霊・異人・魑魅魍魎の住まう処・死後の世界・他界とされていた。そして、山そのもの、山内の異様な木、森、峰、絶頂、岩石、洞窟、川、滝などの自然景観をこれらのものとむすびつけて名づけることが試みられている。それに加えて山内の美しい、あるいは逆に異様でおそろしい自然景観の中で修行した宗教者が、自己の神秘体験や宗教思想にもとづいて、霊地の命名を試みることもまま認められた。不動岩・弥陀ヶ原・禅定岩などは、その所産ともいえるものである。

こうした霊山の中でも、修験道の中心道場である大峰山系には、全国から数多くの修行者が集まって抖擞修行した。彼らはこの大峰山系で修行したあと、自己の有縁の地の霊山を修行道場とした際に、大峰山系の霊地と

似た景観・岩・木・滝・川・泉に出会うと、それにあやかった名前をつけていった。勿論彼らが自己の体験にてらして独自の命名をしたことも少なくなかった。こうしたことを考えて見ると、全国各地の山名や山内の霊地の名には共通のものがあつて、その多くが山岳信仰と修験道の世界観や伝承に基づいていると思えてくるのである。そこで本小論では、まず山岳信仰や修験道について簡単に紹介したうえで、修験道を育んだ大峰山系の山名や霊地名を紹介する。次いでこれを参考にして全国の主要な霊山に見られる山名や霊地名を検討する。そしてこれにもとづいて地名に見られる山岳信仰と修験道の世界観や庶民生活との関連について考察することにした。

1. 山岳信仰と修験道

日本の山岳信仰には弥生時代以降、里に定住して水田稲作を営むようになった人々のものと、彼らに追われて山中に入り狩猟、木こり、採鉱などに従事した山人のものとが認められる。このうち歴史的には先行すると推定される山人の山岳信仰は、山の神を獲物の動物、木、鉱物資源を与えてくれる女神として崇めるといふものである。これに対して水田稲作民は山岳を農耕や生活に必要な水を与えてくれる水分神がいる処と考えた。彼らは山の神を水分の神と捉え、蛇や龍をその使いと信じたのである。山には魑魅魍魎・魔物・鬼や天狗・山姥などの異人が住まうとして、恐れられもした。山人も一種の異人と見なされた。こうしたことから里の農耕民は山に入ることを忌んで、山麓から山の神を拝したのである。

柳田民俗学では、里の背後に聳える木々が生い茂った秀麗な山や丘は祖霊の住処とされ、山の神そのものも祖霊を神格化したものと受けとめられた。山の神は春先きの卯月八日には里におりて田の神となり、秋まで子孫の農耕を守ったうえで山に帰って山の神となる。これが農村の神社の春まつりと秋まつりの淵源である。山の祖霊は産神として誕生した赤ん坊に魂

を授けると信じられもしたとしている。もっとも中国からの帰化人は山岳を仙人の修行の場とする道教の信仰をもたらし、仏教の僧侶も山林修行を行った。特に奈良の元興寺の僧侶は吉野山で虚空蔵求聞持法などの修行を行なった。こうした山林修行者の伝統の中から、比叡山による最澄の天台宗、高野山を道場とする空海の真言宗が育まれたのである。

平安時代には密教を旨とした真言宗は勿論天台宗も密教化した。密教僧は籠山修行によって獲得した験力をもとに加持祈祷を行なった。彼らのうちとくに験力にすぐれた者は験を修めた者という意味で修験者、山に伏して修行したことから山伏と呼ばれた。彼らは『続日本紀』文武天皇3年(699)に韓国連広足の讒言を受けて伊豆嶋に配流された役小角を理想上の修行者と仰いで、吉野(金峰山)、熊野、葛城山などで修行した。また金峰山で修行した醍醐寺の開山聖宝(832-909)が、役小角(役行者)以来跡絶えていた金峰山の峰入を再興したとの伝説も作られた。

金峰山では天慶4年(941)に道賢が山中の他界を遍歴して菅原道真の霊にあい、都に災厄をもたらしていることを知らされた。この道真の御霊を鎮める為に京都に北野天神社がまつられた。また疫病を鎮める為に牛頭天王社がつくられもした。修験者が峰入修行によって御霊を鎮め、疫病を除去する験力を得ることをめざしたこともあってか、金峰山には威徳天神や牛頭天王がまつられた。また永承7年(1052)から末法に入るとされたことから、弥勒の下生にまみえることを願って、弥勒の浄土とされた金峰山への参詣(御岳詣)が盛行した。特に寛弘4年(1007)8月には藤原道長が御岳詣をして経塚を営んでいる。この頃から金峰山の神格として金剛蔵王権現が崇められるようになるが、鎌倉時代初期には役小角の金剛蔵王権現感得譚が創られた。これは役小角が金峰山上の岩石に向って自己の守護仏を求めて祈念したところ、釈迦、観音、弥勒が相ついであらわれたが、これらを退けると、最後に忿怒身の金剛蔵王権現が涌出したので、これを守護神としたというものである。それ以後吉野(金峰山)の修験者は金剛

蔵王権現を自己の本尊としているのである。

院政期に入ると皇族や貴族の熊野詣が盛行する。熊野には木の神とされる家津御子神（本地阿彌陀如来）をまつる本宮，寄神の速玉神（本地薬師如来）をまつる新宮，那智の滝の神と熊野夫須美神（本地千手観音）をまつる那智の熊野三山があり，本宮は阿彌陀の浄土，那智は観音の補陀洛浄土への入口とされた。寛治4年(1090)に熊野御幸された白河上皇は先達を勤めた園城寺の増誉を熊野三山検校に補任して三山を統轄させ，京都に聖護院を賜った。熊野には本宮に長床衆，新宮に神倉聖，那智には滝籠衆などの修験がいた。また全国各地から檀那を熊野に導びく先達も多かった。室町時代になると，熊野三山検校は聖護院門跡の重代職となった。聖護院は東山の新熊野社（若王子）を熊野三山奉行とし，各地の主要な熊野先達に年行事の職を与え，霞と呼ばれる一定地域の修験や檀那を支配させ，本山派と呼ばれる教派を形成した。

一方室町時代後期には大和の石上神社別当の内山永久寺・吉野桜本坊，紀伊の高野山・根来寺，近江の飯道寺，伊勢の世義寺などの近畿地方の約36ヶ寺に依拠した修験者は，山上ヶ岳の奥の小篠に拠点を置いて，当山三十六正大先達衆と呼ばれる結社を形成した。戦国期に入り，その数が12に減少して，当山十二正大先達衆とよばれたこの結社は醍醐三宝院を本寺にいただき，当山派と呼ばれる教派を形成した。江戸幕府は慶長18年(1613)に山伏法度を出して全国各地の修験を本山派か当山派のいずれかに所属させ，両派を競合させて修験者を統制した。もっとも吉野山（金峰山）と羽黒山は日光輪王寺配下の修験として存続した。また江戸時代初期に本山派に属した豊前彦山の修験も，元禄9年(1696)には本山派を離れて，天台修験別山彦山派となった。なお醍醐三宝院は江戸時代中期になると，聖宝の廟がある吉野鳥栖鳳閣寺の名跡を江戸にうつし，江戸鳳閣寺を当山派の諸国総袈裟頭として真言系の修験を直接掌握しようとした。

江戸時代には本・当両派の地方修験の多くは門跡の一世一度の大峰の峰

入に供奉する他は、各地の霊山で修行した。こうしたこともあってか、各地の霊山には大峰山系と同じ山名や霊地名が散見する。また富士山、木曾御岳への民衆の登拝も盛んに行なわれた。けれども明治5年に政府の神仏分離政策にもとづいて、修験道は廃止され、本山派は天台宗寺門派、当山派は真言宗醍醐派、吉野山と羽黒山は天台宗、英彦山は神社となった。また御岳講は御岳教、富士講は実行教・扶桑教などとなった。けれども明治末年頃から諸霊山では旧修験や在俗信者の峰入修行が盛んになっていった。そして第二次大戦後、旧本山派の修験宗（現在は本山修験宗）、旧当山派の真言宗醍醐派、吉野の金峯山修験本宗、羽黒の羽黒山修験本宗などが設立され、峰入修行を盛んに行なっている¹¹⁾。

2. 大峰山の地名

中央における修験道の根本道場、大峰山は現在は狭義には奈良県吉野郡の山上ヶ岳、広義には吉野から熊野に到る山系全体をさしている。ただ古代から中世にかけては熊野から見た釈迦岳、深仙、前鬼のあたりをさし、近世期には金峰山（吉野と山上ヶ岳）と熊野三山の間の山系をさしている。その語義を検討すると、大峰は大と峰（ミネ）から成り、「ミネ」の「ネ」は高峻の義、「ミ」は褒称（『箋注和名抄』）である。また、「ミネ」は山上に神がいます御根の義（『名言通』）で、それに多量と賛美を示す「オオ」（大）を付したとの説もある。いずれにしる本来普通名詞で、神がいる美しい多くの山が連っている山系をさすと考えられよう。ここでは広義の意味、すなわち、吉野から熊野に到る山系全体を大峰山とし、それに含まれる山々の名、山内の霊地名を紹介することにしたい。

大峰山への入口にあたる吉野と熊野は共に語尾に野を付している。古代においては「ノ」は低木などの繁った山裾、高原、台地上のやゝ起伏に富む平坦地をさしている¹²⁾。吉野はこの「ノ」に^よ良し、^よ宣し、^よ善きを意味する美称を付したもので、広義には吉野川流域の野、狭義には現在吉野山と

通称される台地をさしている¹³⁾。なお吉野山から山上ヶ岳にいたる山塊を金峰山と呼び、この金峰山上の岩から金剛蔵王権現が涌出したとされたのである¹⁴⁾。熊野の「クマ」はコモリ（隠）の義（『古事記伝』）、「クマノ」は「カミノ」（神野）の転（『古史通或問』）とされている¹⁵⁾。長寛元年（1163）になる『長寛の勘文』所掲の「熊野権現御垂跡縁起」では、熊野本宮の大湯原の3本の櫟の木に熊野三所権現が示現したとしている。なお熊野三所権現はのちにその神格が十二柱となり、熊野十二所権現と呼ばれた。ちなみに古来山の神を十二様と呼んでいる処が多く、この信仰が熊野信仰と習合したとも考えられよう。

大峰山中の霊地名は時代によって若干の展開が認められる。本項では大峰修験の成立期にあたる鎌倉時代初頭の『諸山縁起』所掲の「先達の口伝」に見られる霊地名、本山派修験成立期の応永4年（1397）頃に成立した『寺門伝記補録』所収の「峯中宿次第」の宿名など、当山派修験の醍醐三宝院と吉野桜本坊に伝わる江戸時代中期の『大峯峯中秘密絵巻』所掲の霊地名を紹介することにしたい。これらの霊地名はいずれも峰入の修験者に知悉されており、彼らによって地方の霊山にもその名が付されたと推測されるものである。

『諸山縁起』では最初到大峰山系の峰々に熊野側は胎蔵界、吉野側は金剛界の各諸尊の名を付し、それぞれの景観や伝承を簡単に付記している。けれどもこれには具体的な地名はあまりあげられていない。これに対して同書所収の「先達の口伝」には、金峰山近くの「阿古谷」（元興寺の稚児阿古が捨身した谷）、「笙の岩屋」（道賢が修行して他界に赴いた窟）、「大嶽」（普賢嶽）、「神仙」（役行者の居処）、「三重の岩屋」（下の重に阿彌陀曼荼羅、中の重に胎蔵界曼荼羅、上の重に金剛界曼荼羅と『大峰縁起』、役行者の御影を安置する）、「宝塔ヶ嶽」（役行者の母の居処）、「空鉢ヶ嶽」（役行者が両親の供養の為に千塔塔婆供養をした地）、「大日ヶ嶽」（役行者が竜神に塔婆を埋めさせた地）、「剣岳」（役行者が智剣を安置した処）

「仙洞」(役行者の三世の骨がある処)が記されている。また同書の別の項には、仙人が居住する山として、「地主仙」,「持経仙」,「竜角仙」,「如意仙」,「摩尼仙」の五岳仙をあげている¹⁶⁾。

『寺門伝記補録』所収の「峯中宿次第」は大峰山中の宿72を列記したものである。もっとも、これに類するものは、すでに長承2年(1133)の『金峯山本縁起』の「大峯宿員 凡一百二十」の項(宿の実数は81)や『諸山縁起』の「大峯宿名百廿所」と「峯宿」の項(実数は共に78)にあげられている。けれども「峯中宿次第」は若干の説明や応永4年(1397)頃の状況を付記している。その宿名は次の通りである。(付記は括弧内に記す)

熊野宿, 西方宿, 備宿(備宿一本無), 栗(栗一本作栗)谷宿, 備別宿, 八重宿, 吹越宿, 相西宿, 黒坂宿, 烏摩馬宿, 垂子宿, 金剛多輪宿, 般若宿, 安日宿, 水呑宿, 湯田(田は一本作甲)井, 玉置宿, 宇河宿, 道気宿, 古屋宿, 恩智宿, 林宿, 星宿, 霧宿, 高座宿, 東屋宿, 苦蘆輪宿(今蛇宿, 仙洞栗), 瑠璃宿, 覚輪宿, 奇宿, 五腧宿, 塔印宿, 智恵宿(今言=怒多-), 平地宿, 多宝宿(持経者也), 箱宿, 朴宿(今言=如来-), 篠宿, 池宿(除多輪), 仙行者宿, 戒清宿(又神仙宿), 空鉢宿, 劔嶽宿(十徳仙也), 経教宿(又錫杖宿) 禅師還宿, 験法宿(又言=大行者-), 車路宿, 教法宿, 吉野熊野, 皮走宿, 小池宿, 横尻宿, 千種宿(又言=小行者-), 劔御山児宿, (又言=屏風-), 七池宿, 小宿(又言=脇宿-), 大篠宿, 小篠宿, 行仙宿, 神福宿, 仙宿, 涌宿, 鎰懸宿, 石林宿(鞍懸宿), 智有宿(寺祇園也), 老仙宿(今祇園也), 観音宿(七高也), 犬久宿(聖尾也), 法師山(青篠也), 富熟仙, 戒経仙(祭野也), 王熟仙(丹治故坂本也)

なお、最後に現在は以上72だが本来は77で五箇所が闕けたと付記している。ちなみに本書にはこの他に『大峰縁起』にのせる諸嶽として、釈迦嶽, 神仙嶽, 湟槃嶽, 羅漢嶽, 大日嶽, 千手嶽, 鸚鵡嶽, 深山嶽, 宝塔嶽

(又名=五胎嶽-)、経嶽、孔雀明王嶽、空鉢嶽、大黒天神嶽、俱利伽羅嶽、東屋嶽、證誠無漏嶽、転法輪嶽、石南草嶽、石仙嶽、蘇莫者嶽、阿彌陀嶽、大禅師嶽、一千草嶽、五大尊嶽、普賢嶽、明星嶽と、峰中の霊窟の名として不動・聖天・吒天・十一面・月見・慈童子・土曜・馬頭・笙の各石屋をあげている¹⁷⁾。

当山派の『大峯峯中秘密絵巻』は吉野から熊野への大峰の奥駈道を大和絵で描いて主なものに地名を付したものである¹⁸⁾。ただこれだけでは充分でないので、以下の記述では同じ頃に当山派の立場から書かれた『大峯細見記』によって、地名の由来などについて若干の補足を試みた¹⁹⁾。

本絵巻によると、大峰の峰入にあたってはまず吉野川の「六田桜渡」で垢離をとる。ついで川を越えて坂をのぼり「青柳宿」(役行者をまつる辻堂がある)、「丈六堂宿」(蔵王堂)、峰薬師、「紙手掛明神」を拝し、「大橋」を渡って「吉野山」に入る。そして「金鳥居」(発心門)、「仁王門」をへて「蔵王堂」に達する。境内には「四本桜」、「大威徳社」、当山派の集会所の「大塔」がある。ここから「勝手明神」、「大梵天祠」をへて「霊鷲山」の麓にある「世尊寺」に到る。さらに「子守社」、「牛頭天王祠」、「修行門」、「金精大明神」、「蹴抜堂」(穢れ抜きの塔ともいう)をすぎ青根峰にある「吉野奥院安禅寺蔵王堂」に達する。この少しさきの丘には「鳳閣寺」がある。「伏拝み」(熊野権現宮あり)、「女人結界石」から先は女人禁制である。

「中小場」、「青笹宿」、「守屋宿」、「薊菊嶽宿」、「足摺」、「小天井」、「大天井」、「鞍掛山」(「蛇腹」「飢坂」ともいう)をへて、洞川との分岐点の「洞辻」に達する。ここから表行場に入り「小鐘掛」(「油掛坂」)、「鐘掛」をのぼる。ついで熊野迄通じているという「お亀石」、「等覚門」をへて「西の覗」でさかさづりにされる懺悔の行がある。「山上権現」の背後には裏行場がある。この行場は「登岩」、「胎内潜り」、「雀石」、「護摩場」、「塞の河原」、「蟻の戸渡り」、「飛石」、「東の覗き」、「平等岩」(下方に阿居

滝),「髪祓不動」,「目洗水」などからなり,ここでの修行は山上権現への後繞道とされている。もっとも『大峰細見記』には,この他に「天の河」,「龍駒馬場」,「御量石」,「衣掛石」,「大黒の窟」,「追分石」,「タスキ岩」,「屏風岩」をあげている。なお山上権現の前には「妙覚門」,右脇に「玉石」と「子守社」,左側に「花小屋」がある。

ここから奥駈道に入る「化和拝宿」をへて,右手に「稻村嶽」を見ながらしばらく行くと,「小笹の宿」に達する。この宿には「行者堂」,「聖宝堂」,当山十二正大先達の宿,「聖天祠」(背後に「胎内の岩屋」),「大黒岩」(同小祠),「竜ヶ嶽」からの川などがある。ここから「阿弥陀峰」,林の中の「脇宿」,「普賢嶽」(途中に「経筥石」あり),「弥勒嶽」(左下に「笹窟」),「蟻の戸渡り」,「薩摩ころがし」,「内侍おとし」などの岩場の難所をこえて「児留宿」に達する。さらに「七つ池」,「国見嶽」をへて,あまり陰しいので,役行者がおそれてひき返したとされる「行者還」を越える。続いて「一之多輪」,講婆世僧正をまつる「講婆世宿」をへて,「弥山」への急坂を登る。山頂には「弁財天社」(天河弁財天奥の院),宿坊のほか「御手洗池」,「雨穴」,「風穴」がある。

弥山を出て「鉢経宿」(八経ヶ嶽),「明星ヶ嶽」,「水の本」(弥山川の水源),森の中の「禅師宿」,「坐禅石」を通り,下の方の「菊岩屋」を拝する。「船之多輪」(船形の湿地),「揚枝宿」をへて「七面山」,「仏生嶽」を見ながら進み「小尻返し」の難所にかかる。この先に二つの岩壁がクレパスをなす金剛界・胎蔵界の境の「両峰分け」がある。つづいて「空鉢宿」,巨岩をまく「椽の鼻」,「羅漢石」をへ,「念仏橋」,「杖捨」をへて「釈迦ヶ嶽」に登る。山頂には釈迦をまつる堂がある。この山麓の「深仙」には灌頂道場の他,灌頂に用いる香精水が流れおちる「四天岩」がある。また背後には「大日ヶ嶽」(山頂を「宝冠の峰」という)があり,鎖で登頂する。ここから「小池の宿」をへて,深仙の宿を守る役行者に仕えた前鬼の子孫が住む「前鬼山」に下る。前鬼の近くには「千手滝」・「馬頭滝」・「不

動滝」からなる「三重滝」,「地の三十六禽」,「天の二十八宿」と呼ばれる岩壁(鉄梯子で登る),「端の岩屋」(現両界窟)などから成る前鬼裏行場がある。

小池の宿から左に進むと「乾光門」,「拝み返し」,「笹の宿」,「花瀬」となだらかな道が続く。役行者が経をおさめた「持経宿」,峠の二本松下の「平治宿」,「奴多宿」をへて,「転法輪山」を眺めて「行仙宿」と「仙ヶ嶽」(笠捨山)に登る。ここから「四阿弥宿」をへて葛川村に下る。ふたたび山に入って「桧の宿」をへて,「御池宿」(善女竜王がすむ菊池あり)「古屋宿」をへて,玉石をまつる「玉置山」に達する。ここから下って「水飲宿」,「嶺の宿」,「金剛多輪」をへて「吹越の宿」に着く。ここは出成りの場所とされ護摩壇がある。そしてさらに進んで熊野川を「御前津渡」の処で渡って「本宮」に達する。

本宮は熊野川に音無川と岩田川が合流する州の上にある。近くにはこの地を遠望する「伏拝み」がある。また大日峠をこえと,「湯峰薬師」がある。熊野川を下って「新宮」に着く。その近くには新宮の神が示現した「御船島」,徐福の渡来伝承のある蓬萊山の下「阿須賀社」,「神倉山」がある。神倉山は神倉聖の行場でガマになぞらえた「ゴトビキ岩」が御神体とされている。「那智山」には「那智権現」と西国巡礼第一番の札所「如意輪堂」がある。また「大滝」(一の滝)をはじめとする「四十八滝」,「檜山」の下「妙法山阿弥陀寺」,観音の補陀洛浄土への船出の浜の「浜宮」と「補陀洛山寺」,補陀洛渡海船の綱を切る「綱切島」,平維盛の入水伝承で知られる「山成島」など数多くの霊地が認められる。

3. 山名とその意味

鏡味完二は主として旧陸地測量部の5万分の1の地形図をもとに,北海道と沖縄をのぞく10867の山峰をとりあげ,これらを接尾語別に分類し,それぞれの高度別頻度と分布を明らかにした²⁰⁾。それによると語尾に

「山」を付すものは、8245 (75.8%——全体との比率、以下同様)、標高頻度の最高値は250 m 位 (以下数字のみあげる) で、ほぼ全国にわたって分布している。語尾が「嶽」のものは1477 (13.5%) で標高頻度の最高値は280 m と350 m に二分され、中国・四国地方をのぞいてほぼ全国にわたっている²¹⁾。語尾「森」は547 (5%)、標高頻度の最高値は510 m で、東北・四国西部・紀伊・甲信地方に分布、語尾「峰」は317 (2.8%)、標高頻度の最高値は300 m で近畿地方に分布している。

この4種を比較すると、「山」は近代以降山岳の語尾名として広く用いられており、実数も多い。ちなみに高橋文太郎は西国の修験の影響の強い地域では伯耆^{ダイセン}大山のように語尾の山をセンと呼んでいるが、これは仙に通じるとしている²²⁾。さきの大峰山では『諸山縁起』所掲の「五岳仙」、『寺門伝記補録』所掲の「峯中宿次第」の「行仙」・「法師山」・「王熟山」、『大峯峯中秘密絵巻』の「霊鷲山」、「弥山」がこれにあたるといえよう。「嶽」を語尾とする山峰は、概して頽岩や崩土を大規模にもつ雄大な山である。そして、小丘でこの部類に属するものには、御嶽社が祀られたものが少なくない。けれどもこの場合も、低山ではあるが、やはり傾斜が大きく且つ露岩の多い山である場合が多い。嶽をこのように捉えることは、一つの大きい山体の中でも認められ、頂上またはその附近の露岩の突兀とした部分が嶽と呼ばれている²³⁾。周知のように金峰山は「金の御嶽」と呼ばれ、大峰山系では『寺門伝記補録』に「大峰縁起」所掲の諸嶽として26のものをあげている²⁴⁾。

「森」は一般には鎮守の森のように、樹木がこんもりと茂って神霊が寄りつくとされる処である。語尾に森がつく山峰も、立面形で均整がとれた穏やかな山容のものである。山形県などで祖霊がこもる処とされる森山、神体山とされる神奈備型の山がこれに属するといえよう。ただし、大峰山系では「禅師宿」の森など一部をのぞいてはあまり見られない。「峰」は分水嶺をなす山頂の呼称で、大峰のような連峰の総称と、「青根峰」・「阿

弥陀峰」(以上大峰山中)や「塔の峰」・「高千穂峰」などのように単峰をさすものがある。

個々の山名の由来は多様である。徳永球雄は山名の由来を地形(「丸山」・「岩倉山」など)、方向(「東山」・「西山」など)、位置(「三国岳」など)、雪形(「駒ヶ岳」など)、歴史的事柄(戸隠山など)、信仰(明神岳など)、その他(烏越山など)に分けている²⁵⁾。そこでこれを参考にして霊山の山名の分類を試みることにしたい。第1は山の形にもとづくもので、丸い形の飯盛山・空鉢ヶ岳、岩が屹立する形の立山・宝塔ヶ岳・剣山(山頂に剣をおさめる)・鞍掛山・神倉山(クラは岩の意味)・烏帽子山(全国で約70)などがある。飯盛山は稲の神を祭る信仰、空鉢は鉢を飛ばして米を得る伝承、その他は神霊が籠るとされた岩の信仰にもとづく命名である。第2は山の色による赤城山・赤倉山(赤は火の信仰に由来するとされる)、黒山・黒森山(黒は死霊を象徴すると考えられる)、白山(シラは再生とむすびつく)である。第3は山の位置によるもので、東北に多い奥山に対する端山(葉山・麓山・羽山)、御岳山に対する御前山(秩父)などがある。なお山形県の羽黒山(月山に対する端黒山)はこの第2と第3が結びついたものと考えられよう。

第4は天界とむすびつけた命名で、天山(愛媛県)・天上(井)山(広島県・山口県・吉野)・高千穂峰(宮崎県)・戸隠山(天岩戸の飛来)、太陽崇拜とかかわる朝日山・旭山・日暮山(和歌山県)・日子山(福岡県の彦山の古名)、月山、妙見山、明星ヶ岳などがある。また各地に見られる雨乞山もこれに類するものである。第5は動植物に因む命名である。動物では駒ヶ岳(山梨県)、白馬岳(長野県)、鹿野山(千葉県)、犬鳴山(和歌山県)、牛尾山(京都府)、竜王山(滋賀県)、九頭竜山・飯縄山(長野県)、烏海山(秋田県)、農鳥山(山梨県)、蝶ヶ岳(長野県)などがある。なおこのうち駒ヶ岳・白馬岳・農鳥山・蝶ヶ岳は残雪の形にもとづく命名である。また大峰山系の鸛鵒岳のように岩山にこだまする山彦にもと

づくものもある。木や草に因むものには、大峰の石南花岳・千草岳・薊菊（アザミ）岳・稲村岳、熊野の檣山などがある。

第6は直接に山岳信仰や修験道にもとづく命名で次のものがある。

(a) インドの須弥山信仰に見られる靈山を宇宙山・宇宙軸・世界の中心と捉える思想に因む弥山・国輪山（吉野金峰山の別称）・妙高山などの山名。金の御岳・金華山（宮城県）などの命名も宇宙山が金であることを反映している。なお山を宇宙全体とする曼荼羅山・両界山（長野県の高妻山）などの命名もこれにつらなるものである。

(b) 釈迦が法華経をといた靈鷲山に因む吉野の靈鷲山、鷲峰山（京都府・鳥取県）などの山名。大峰山を靈鷲山の坤の角の一部が飛来したものとする伝承も認められる²⁶⁾。

(c) 道教の不老長生の仙境に因む、熊野新宮の蓬萊山、不死の山（不二・富士）、姑蘇山（仙人の居処・高野山の別称）、深仙、行仙岳、仙が岳など。

(d) 仏菩薩や神格に因むもの。仏教や修験などに関するものには、前項でとりあげた『寺門伝記補録』所掲の大峰山系の釈迦・羅漢・大日・千手・孔雀明王・大黒・俱利伽羅・阿弥陀・五大尊・普賢の諸嶽を始め、不動山、薬師岳、虚空蔵山、権現山（全国で約50）、蔵王山、妙見山など種々のものがある。神名には八幡山、明神山、天神山、などがある。

(e) 修行に因むもの。『寺門伝記補録』所掲の大峰山系の嶽の中の仏生嶽、経ヶ嶽、転法輪嶽、涅槃嶽、証誠無漏嶽など。

(f) 修行者に因むもので、そこで修行した仙人に因む石仙嶽、仙人の舞を意味する蘇莫者嶽、僧侶に因む大禅師嶽、法師嶽、役行者伝承を思わせる行者山、具体的に修行者をあげた常念嶽（長野県）などがある。

第7は複数の靈山を一つの山名にまとめたもの。筑波山・二上山（奈良県）など男・女の山が対をなすもの、羽黒・月山・湯殿の出羽三山、本宮・新宮・那智の熊野三山、御前峰・大汝峰・剣峰から成る白山など三山

をまとめたものがある。なお俗体嶽・女躰嶽・法躰嶽からなる英彦山、男体・女峰・太郎山からなる日光山は夫婦と子供というように三山が家族を構成している。ちなみに日光に関しては、中禅寺湖畔に比定された観音の浄土・補陀洛が^{フタラ}二荒と当て字され、これをニッコウと音訓みしたものに日光の漢字をあてたとの伝承も認められる。

第8は中央の霊山の名に因むもので、熊野三山に因む熊野・本宮・新宮・那智などの山、吉野の御岳（金峰山）に因む各地の金峰山・御岳・三岳・蔵王山²⁷⁾、大峰山にちなむ北大峰（京都府）・西山上（徳島県）、各地の富士・白山などがある。なお富士山は浅間山とも呼ばれ、その分布は当初は富士が望見される地域に限られたが、近世以降は富士に似た山容の山を所在地の地名に富士を付して呼ぶようになり（例 津軽富士・岩木山）その数は216に及んでいる²⁸⁾。

4. 山内の霊地

鎌倉時代初期の大峰山では『諸山縁起』によると、役行者の居所とされた神仙、その三世の骨のあった仙洞、阿古が捨身した阿古谷などの霊地があげられている。仙洞は仙人の住处、または『法華経』の「提婆品」所掲の釈尊がつかえた阿私仙の住まいに因む命名である。また阿古谷は死霊をおさめた「タマヤ」に淵源を持つ命名とも考えられる²⁹⁾。

室町時代末の本山派修験の伝承を示す「峯中宿次第」に見られる宿や窟の名称は、熊野から吉野にと抖擻した修験がその地形を修験道の思想、儀礼などに因んで命名したと思われるものである。以下命名の基をなしたと推測される事項ごとに、具体例をあげ、難字には括弧内にその意味を付しておいた。

1. 天界・気象； 星宿（以下宿を略す）・霧・吹越（風）・土曜石屋・月見石屋。
2. 方角 場所； 西方・相西・脇。

3. 地形； 奴多（尾根筋近くの湿った平地）・黒坂・聖尾（尾根）・道気（峠か）・金剛多輪（峠）・除多輪（峠）・祭野・坂本（山麓）。
4. 水場； 栗谷・水呑・湯田・池・小池・涌・七池・垂子（雨時に滝を生じる）。
5. 岩場・石； 玉置・高座・瑠璃・鎰懸・石林（鞍懸とも）・屏風（絶壁）・塔印（岩柱）。
6. 草・木； 林・篠・大篠・小篠・青篠・朴（モクレン科の落葉樹）・千種（草か）。
7. 動物； 蛇・犬久（犬か）。
8. 建造物など； 古屋（古家）・東屋（四方に軒をおろした小屋）・仙洞・苦蘆輪（苦屋）。
9. 神格； 如来・観音・多宝（多宝如来）・不動・聖天・吒天・十一面・慈童子・宇河（宇賀神か）・神福・寺祇園・今祇園・馬頭の石屋。
10. 思想； 御山（弥山か）・経教・教法・般若・恩地（恵み）・覚輪（悟か）・智恵・智有・八重（八葉か）。
11. 儀礼； 備・備別（供物を備える）・祭野・験法・七高（七高山での除災の祭に因むか）・戒清（戒律）。
12. 法具； 剣・五肱・錫杖・空鉢・箱（経箱か）。
13. 仙人； 仙行者・神仙・十徳仙・行仙・仙・老仙・富熟仙・戒経仙・王熟仙。
14. 僧侶・持経者； 大行者・禅師還・小行者・法師山。

これを見ると地形の上では岩場や水場、草木では篠、神格では不動・聖天・観音・祇園など、修行者では特に仙人が多く、彼らが神仏に供物を備えて戒を守って修行して験をおさめようとしていたことが推測される。

江戸時代になると全国各地の霊山で大峰山にならって修行が行なわれるようになる。そこで『峯中秘密絵巻』とあわせて、各地の霊山の霊地名を

主として地形と関係づけて検討することにしたい。その際前項であげた大峰山系以外のものは括弧内にその霊地所在の山名などを付記しておいた。

まず霊山には川を渡って入ることが多いが、この川には大峰の「六田渡」・「桜の渡」(吉野川)・「御前津渡」(熊野川)のように渡が設けられている。ここで垢離をとり、「紙手掛」(吉野)・「七五三掛」(出羽三山)などの地名の処で、首に結袈裟をかける。なおほとんどの霊山は明治迄は女人禁制とされていた。現在も奈良県の山上ヶ岳、岡山県の後山はその伝統を継承している。こうしたことから山麓には「結界石」・「女人堂」、女人禁制を破った巫女などが化した「姥石」・「婆石」・「美女岩(杉)」などがある。高野山には弘法大師の母が結界を越そうとしたら大岩が落ちて来たので弘法が押しあげて止めた「押上岩」、ねじふせた「ねじ石」などがある。役行者の母が峰入を止められ、足摺をして残念がった「足摺」、遠く山岳の霊地を拝した「伏拝み」(吉野・熊野)などの地名もある。大峰には抖擻をおえた修行者が霊山を拝することに因む「拝み返し」などの地名もある。

山内の霊地では、まず岩が累々としている行場が注目される。こうした岩場では、岩をのぼる「登石」、崖地をのぼる「小鐘掛」(「油掛坂」とも)、岩壁を鎖をつかって登る「鐘掛」などがある。四国の石鎚山などでは「一の鎖」・「二の鎖」・「三の鎖」の絶壁を登って山頂に達している。逆に絶壁からさかさづりにされる所が「のぞき」である。のぞきは山上ヶ岳の他にも、犬鳴山、山城国の大悲山、谷川岳、志賀高原など多くの霊山で認められる。こののぞきの岩を「釣船岩」(霊山・金華山・栗駒山)・「捨身岩」・「覗き岩」と呼ぶ処もある。両側が深い絶壁をなす岩の峰は「蟻の戸渡り」・「剣の刃わたり」・「馬の背」・「牛の背」と呼ばれる。また懸崖の途中に岩をけずるようにして作られた小路は「屏風の横駈け」と呼んでいる。この別称には、身につけた法具などを岩にすりつけて通ることに因む「笈ずり」(立山、大日ヶ岳)・「貝すり」(同前)・「小尻(鎗)返し」、そこ

から転落した者に因む「薩摩ころがし」・「内侍おとし」・「稚児おとし」(彦山), おそろしさをあらわす「キンヒヤシ」(白山) などがある。

絶壁から突出したり、屹立した岩の周囲をまわる行もあるが、こうした岩は「平等岩」・「行道岩」(伊吹山)・「巡り岩」(香川県我拝師山)・「椽の鼻」(大峰) と呼ばれる。また石と石の間を飛びこす「飛石」, 「両童子岩」(ともに大峰の深仙) などもある。大峰山系のほぼ中央にある大きなクレパスは吉野側の金剛界と熊野側の胎蔵界の境とされ「両峰分け」と呼ばれている。こうしたクレパスにかかる橋を「念仏橋」, そこに杖を捨てることから「杖捨て」ともよんでいる。またクレパスの間を通り抜ける修行があることから、その両側の岩を「押分岩」, その時クレパスが悪事をした人には針の穴のようにせまくなり、善根を積んだ人には象の耳のように大きくなることから「針の耳」と呼んでいる(彦山の鷹巣原)。また洞窟や岩の間をくぐりぬける行場を、「胎内くぐり」・「胎内のいわや」と呼んでいる。

行場内の異様な形をしたり、奇瑞を示す岩石にはそれに因んだ名前がつけられている。「雀石」・「大黒岩」・「お亀石」・「羅漢岩」・「四天岩」(「深山灌頂」に用いる香精水が流れおちる)・「御光石」(立山 光を発する)・「玉石」(玉置山), 彦山の「材木石」・「白蛇石」・「千仏岩」・「梵字岩」・「わくど岩」(蟄蛙に似た岩)・「雨坊主」(雨乞)・「花月座岩」(花月が天狗に攫われる前に座っていた岩)などがこれである。またそこで坐禅をした「坐禅石」, 法螺を吹いた「貝吹岩」なども知られている。

大峰山の峰入では奥駈が中心をなしている。また各地の修験霊山では登拝や峰をめぐる抖擻行が主要なものとなっている。そこで次にこうした登拝や抖擻の際に出会う霊地名を検討することにしたい。まず岩が多く急な坂では役行者すら引き返したとの伝承が作られ、「行者還」の名が付されている。羽黒では役行者が山の神から修行して出なおすように命じられたとの伝承が付されている。なお山上ヶ岳への吉野道の鞍掛山の坂は「蛇

腹」とか、「飢坂」と呼ばれている。山中の石が累々とした原は「塞の河原」・「地獄原」、牛などの動物に似た石があることから「畜生原」（立山）といわれ、石の地蔵などがおかれている。こうした場所は死霊がいる処とされ、その供養のために小石が積まれている。そしてこれに因んで、「クヨーシミズ」（白山麓白峰）、「イシヅカ」（富士山麓上井手）、「テンノカワラ」（南会津）、「オサメゴト」（宮崎県の椎葉）、「ゴオリンサン」（兵庫美方郡）とも呼ばれている³⁰⁾。

霊山の岩場には滝があり、それを中心に行場が設けられていることも少なくない。鏡味完治によると、地理調査所の5万分の1の地形図には853の滝の滝名があげられている。特に滝の多い山は、日光、八ヶ岳、木曽御岳、鳥海山、阿蘇山、熊野である。滝名では「不動滝」78(9%)「大滝」60(7%)が多い。その他では色に因む「白滝」17・「黒滝」7・「赤滝」4、神格に因む「観音滝」9・「地蔵滝」3・「毘沙門滝」2・「明神滝」1・「権現滝」1などがある。また滝に、第1、第2、第3と数字を冠したり（熊野那智、前鬼）、「四十八滝」（那智、三重県の赤目）と総称するものなどがある³¹⁾。これらのことから霊山の滝が修験の行場となっていることが推測される。なお谷が行きづまり、水もない所を吉野の北山では「カマ」・「タワ」と呼んでいる。また立山では「アシクラ」（芦峠の字をあてる。クラは岩の意）、山上ヶ岳や羽黒では「アコヤ」と名付けている。こうした場所の多くは死者の靈魂の留まる処とされている。これに対して天にも達するように大岩が屹立している処は「大天井」・「小天井」・「天柱峰」（石鎚）、「白雲峰」（犬鳴）、「ホコタテ」（鳥海山）と呼んでいる。

山中の美しい草原や、花畑は浄土になぞらえられて「浄土原」・「蓮台野」・「弥陀ヶ原」、天上の他界に比せられて「高天原」と呼ばれている。また美しい苔生地や砂地は「ヤマノカミノアソビバ」（茨城県高岡郡・滋賀県犬上郡）、「テングノスモウバ」（月山・朝日岳）、「天狗の庭」（飯豊山・妙高山）、「雷様の年取り場」（蓼科高原）と呼ばれている。こうした

草原や山頂にある池も霊地とされている。奥駈道には「七つ池」・「御手洗池」・「水の本」・「御池」・「水飲場」などがある。また山頂の池の名称には、阿蘇の噴火口の「お池」、別当寺の名称にもなった早池峰山の「妙泉」がある。火山などの赤い池は死後女性の霊が赴く「血の池」とされている。また湧き水は「籠り水」(彦山)・「越水」(戸隠)・「鬼の泉水」(霧ヶ峰)・「御泉水」(蓼科山)などと名付けられている。

富士・立山・木曽御岳・男体山・浅間山・羽黒山・月山・鳥海山・岩木山・八海山など多くの霊山では行者が白衣に身をかためて登拝することを禪定と呼んでいる。これが転じて山頂を「禪定」と呼びもした。また山頂から望見できる範囲に応じて「国見岳」・「三国岳」・「八方睨み」などの呼称もある。山頂から四方に道がのびている処は、「辻」(飛驒の双六谷)・「天辻」とも呼ばれている。福岡県の宝満山は山頂に竈岩と呼ばれる3つの巨岩が立っていることから竈門山ともいわれる。また越後の北魚沼郡では霊山の山頂を「ボンテン」と呼んでいる。火山の噴火口は「オハチ」その内側は「内院」。(富士・那須岳)・「ミハチ」(霧島)・「ホド」(三宅島)・「カナド」(八丈島)・「オカマ」(大島)・「シンダケ」(芯岳・妙高)・「ジゴク」(白山)、火口湖は「イケ」と呼ばれている。そして富士山などではこのオハチをまわる修行をお鉢まわりとよんでいる。

大峰の奥駈や葛城山の峰入では、山系を構成する山々の頂上をへて屋根づたいに抖擻する。その際山と山の間の鞍部のことを「タワ」・「タア」・「タヲ」と呼び、多輪の字を充てている。ここは里人が山越えして、他村にいく時に越える峠になっている。同じ場所を山人はタワ、里人はトウゲと呼んでいるのである。なお山中で修行する場合には当初は洞窟を居所とした。大峰山中には、「笙岩屋」・「鷺の岩屋」、前鬼の「両界窟」など数多くの洞窟がある。これらの岩屋の総称には、弥勒の内院の四十九院になぞらえた彦山の「四十九窟」、観音の三十三身に因む戸隠の「三十三窟」などがある。その後、宿泊のための小屋がつくられたが、その多くは石を積

んでつくった石室で「オムロ」(岩手山),「室堂」(立山)などとよばれた。これらに泊って抖擻するわけであるが、大峰の奥駈では既述のように鎌倉期以降 120 の宿があったとされていたのである。

結

上記の大峰山や各地の霊山名、山内の霊地名の検討をもとに、地名に見られる山岳信仰や修験道の世界観と人々の生活とのかかわりを考察して本小論の結びとすることにしたい。すでに最初に述べたように山岳は里人にとっては他界とされている。それ故山岳の入口の川で垢離をとり、渡り、結袈裟をつけて山に入っていくことが、「六田渡」、「垢離取り」、「紙手掛」などの地名に示されている。また霊山が女人禁制とされていたことから、「結界石」・「女人堂」(母子堂)、禁制を破って石や木に化した比丘尼などに因む名が認められる。

大峰山の奥駈や諸霊山の抖擻では尾根道を縦走するが、この道に「大天井」、「小天井」、「天の二十八宿」と命名された場所があるのは、ここが天界と人間界の境、さらには天界そのものとされたことを示している。「天上山」、日・月・星に因む山名もこうした信仰を物語っている。また「国軸山」、「天柱石」など山岳を人間界と天界を結ぶ軸とする命名も認められる。山中他界観は山中の浄土や地獄に因む「浄土原」・「弥陀ヶ原」・「補陀洛」・「霊山」(法華経にとく浄土)・「地獄谷(池・原・穴)」・「むくろ谷」・「阿古屋」・「塞河原」・「血の池」・「餓鬼山」・「餓鬼田」などの地名、地藏・虚空蔵・阿弥陀を冠した山名にリアルに示されている。さらに「曼荼羅山」や「両界山」(長野県の高良山)の山名、大峰の「両峰分け」などの地名は山岳を金剛界、胎蔵界の曼荼羅で示される宇宙そのものとする思想を示している。また大峰山の山上ヶ岳の「お亀石」を熊野まで続いているとし、大峰山系の中央に「弥山」を位置づけ、ここを吉野熊野の宿と名づけていることは、大峰山系全体を須弥山世界とする信仰にもとづく

も考えられよう。なお須弥山に因んだ弥山や妙高の山名は全国各地に認められる。

山名に大日ヶ岳、不動山、薬師岳、観音山、権現山、稻荷山、明神山、八幡山、天神山など具体的な神仏名をあげる例は全国に見られるが、これは山岳を神仏の在所とする信仰にもとづいている。また山岳や山内の霊地に天狗や鬼の名を付すことは、天狗（山・岳・森・鼻・棚・塚・平・岩）、天狗の相撲取場、鬼が城、鬼ヶ岳、鬼面山、鬼首山など数多く認められる。さらに天狗が榛名山を富士山より高くしようと夜もっこで土をはこんだが、最後の一もこの時、鶏が鳴いたのもこの土をすてたのが「一もっこ山」だというように、天狗伝承にもとづく山名もある。また大峰山や葛城山などには役行者に仕えた前鬼の子孫がすむ「前鬼」という集落があり、灌頂道場の深仙を守っている。さらに戸隠の「鬼無里」、彦山の「岳滅鬼山」のように鬼が退治されていなくなったことを示す地名もある。これらの天狗や鬼は山の魔物ひいては山伏そのものとされたのである。この他、蛇、竜、熊、鳥、鷲、鳥、馬、鹿、犬、獅子などに因む山名や山内の霊地名があるが、これらのものは山の神そのもの、あるいは山の神の使いと信じられていたのである。

山岳は古来仙人が不老長生を求めたり、密教の験者や修験が成仏や験力を求めて修行した道場である。こうしたことから特にきびしい山岳修行がなされた中世期の『諸山縁起』や「峯中宿次第」には、仙人や行者に因んだ山名や宿の名、修行の内容を示す戒・験法・経教・教法、悟りを示す転法輪・覚輪・智などを付した宿が設けられていた。山中には三途川になぞらえた川で象徴的に死んで他界である山に入り、地獄谷などの地獄、餓鬼を示す飢坂、畜生のいる畜生原などで修行し、のぞきなどで懺悔して弥陀の浄土に入り、成佛の過程に充当された十界修行をし、胎内くぐりをして仏として再生するという峰入の思想を示す地名が断片的に残っているのである。ちなみに虚空蔵菩薩の名を付けた霊山が全国に数多くあり、羽黒

山では秋の峰の最後の行は虚空蔵小屋で行なっている。虚空蔵は十三仏の最後の仏ゆえ、この命名は山岳修行者が生前に成仏の保証を得る逆修の為に修行していることを示すと思われるのである。

近世になって農民などの民衆の登拝が盛んになると、山中の湿原を田になぞらえて田代、御田原と名づけたり³²⁾、雨乞山に雨を祈ったり、山中の雨乞池から水をもらってきて雨乞をするなどのことが行なわれた³³⁾。稲村嶽、飯盛（森）山、飯豊山、飯山などの山名は農民の豊穰の願いを物語っている。また子守岳、子安社などは水分がなまって子授けの信仰となったことを示す命名である。今一つ興味をそそられるのは山の残雪にもとづいて、種蒔などの時期を決めたり、豊凶を占ったことを示す山名である。これには白く残った雪の形にもとづく「農鳥岳」（白根三山の一）・「駒ヶ岳」・「駒形山」・「僧ヶ岳」（黒部山系）・「人形山」（岐阜県白川村）と雪からあらわれた黒土の形にもとづく「舟」（鳥海山）・「種蒔爺」（後立山の爺岳）・「代馬」（白馬岳）の二種のものがある³⁴⁾。

山をめじるしにするという点では、北海道の「燈明岳」・隠岐の「焼火山」・出雲の「日御崎」、各地の「ゴマタキ岩」、「竜灯」など航海の際の山あてにもとづく命名が注目される。この他、「金の御岳」（金峰山）、「丹生」（水銀）など鉱山にちなむ山名や霊地も少なくない。また薬草が多いことに因む「占治原」（伊吹山）、疱瘡を予防する「イモイシ」（八海山）など治病とかかわる命名もある。このように霊山が庶民生活の種々の局面を守護すると信じられていたことが山名や山内の霊地名によって示されてもいるのである。

注

- 1) 鏡味完二『日本地名学』日本地名学研究所刊 昭和 32 年
- 2) 松尾俊郎『日本の地名 歴史のなかの風土』新人物往来社 昭和 51 年
- 3) 柳田国男『地名の研究』古今書院 昭和 11 年、『定本柳田国男集』20 巻、

筑摩書房

- 4) 柳田国男・倉田一郎共編『分類山村語彙』昭和16年
- 5) 『山岳語彙採集帳』日本山岳会, 昭和11年, 高橋文太郎「山岳語彙の採集」
方言 7の9 昭和12年, 「山岳語彙蒐集報告(1)」『山岳』33の1 昭和
13年
- 6) 高橋文太郎「山と地形のことば」(1)~(5)『旅と伝説』15の1~5 昭和17
年. なおこの論文にさらに加筆した論考「山名と地形名」が高橋文太郎『山
と人と生活』金星堂, 昭和18年に収録されている.
- 7) 角田吉男「山岳語彙」山岳講座 第8巻, 共立社 昭和11年
- 8) 岩科小一郎『山岳語彙—登山者のために』体育評論社 昭和15年. なお本
書は平成5年に同氏の山岳語彙に関する三論文を加えて, 藤本一美編『山こ
とば辞典—岩科山岳語彙集成』として百水社より刊行されている.
- 9) 徳久球雄はこの他に『山を読む辞典』東京堂, 昭和56年を著しているが本
書には「山名の由来」の項があり, 簡単な山名の解説がなされている.
- 10) 五来重編『修験道の伝承文化』山岳宗教史研究叢書16 名著出版 昭和56
年 2~26頁参照
- 11) 山岳信仰と修験道の詳細に関しては宮家準, 「修験道と山岳信仰」宮家準
『修験道と日本宗教』春秋社 平成8年所収, 宮家準『山伏—その行動と組
織』評論社 昭和48年参照
- 12) 『日本国語辞典15』小学館 昭和50年 691頁. なお「ノ」に対して広々
とした草原を「ハラ」と呼んでいる. また「ノ」を静岡県磐田郡や京都府竹
野郡網野町では墓地や墓場, 富山市や岐阜県吉城郡・富山県砺波・石川県鹿
島郡では火葬場の意味で用いている.
- 13) 池田末則『日本地名伝承論』平凡社 昭和52年 343-345頁
- 14) 山上ヶ岳の頂上の大峯山寺は大きな岩の端に建立されており, その先端の岩
(現在 大峯山寺内陣下の竜穴) が, この伝承の地と推測される. それ故,
この岩の崇拜が金峰山の原初の信仰と考えられる.
- 15) 「日本国語大辞典」6 586頁, なお阪倉篤義は『高山寺本和名抄』で神稲と
いう地名を「クマシロ」と訓ませていることに注目し, この「クマ」は隠れ
るという意味の動詞クムから派生したものとしている(阪倉篤義「語源—神
の語源を中心に」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙I 語彙原論』明治書院
昭和57年参照). この説に従うと「クマノ」は本源的な隠れた存在(神)の
いる野ということになる.
- 16) 「諸山縁起」『寺社縁起』日本思想大系20 岩波書店 昭和50年 131-136
頁, 112頁 なお本項の記述に関しては宮家準『修験道思想の研究』春秋社

昭和 60 年 270-329 参照

- 17) 『寺門伝記補録』第 17 『大日本仏教全書』仏書刊行会 大正 4 年 280-281 頁
- 18) 本項の記述は天明 7 年(1787)に桜本坊 51 世快済が三宝院本を模写させたものを、昭和 41 年 5 月桜本坊 65 世巽良乗師が刊行したものによっている。なお宮家準『大峰修験道の研究』佼成出版社 昭和 63 年 263-340 頁参照
- 19) 『大峰細見記』全 10 巻 天理図書館所蔵
- 20) 鏡味完治『日本地名学』日本地名学研究所 昭和 32 年 上 126-129 頁, 下図 1~10 参照
- 21) この嶽の分布が少ない中国・四国地方では峠をタウと呼んでいる。ただしこの相関の意味は定かではない。鏡味完治, 上掲書 下 図 3, 9 参照
- 22) 高橋はこの例として氷ノ山・蛭山・大山・船上山(伯耆), 鷲峰山(山城), 金剛山(河内), 弥山・金峰山(大和), 霊仙(近江), 弥山(出雲・安芸・丹波), 大仙(讃岐), 管山・扇山・沖山(因幡), 高山(紀伊), 金峰山(甲斐)をあげている(高橋文太郎「山と人と生活」金星堂 昭和 18 年 209 頁)。
- 23) 鏡味完治 上掲書 上 131 頁
- 24) 沖縄諸島のウタキも低地の岩をまつたものが多く、信仰面では本土の御嶽につらなると考えられよう。ただしその呼称は奄美はウガミヤマ・カミヤマ・モリヤマ・オボツヤマ・ゴンギンヤマ・テイラヤマ, 沖縄本島はウガミ・ウガン・御嶽・ウガングーツ, 宮古はムトトゥ・ヤマ・ウガ・森, 八重山はオン・ワン・ワー・ムル・ヤマ・ウガンというように多様である(山下欣一「沖縄・奄美の山岳伝承」五来重編『修験道の伝承文化』山岳宗教史研究叢書 16, 名著出版, 昭和 56 年 645 頁)。
- 25) 徳久球雄『山を読む事典』東京堂, 昭和 56 年 172-178 頁
- 26) 「諸山縁起」『寺社縁起』日本思想大系 20. 岩波書店 昭和 50 年 90 頁
- 27) 熊野については宮家準「熊野権現の伝播と民俗」民俗学研究所紀要 16 平成 4 年, 金峰山については, 宮家準「修験霊山の伝承と峰入」歴史読本 625 昭和 59 年参照
- 28) 鏡味完二 上掲書 上 141-151 頁 同下, 図 8, 富士宮市商工会議所の調査参照
- 29) 柳田国男『郷土生活の研究』筑摩書房 昭和 42 年 167 頁
- 30) 高橋文太郎「山岳語彙蒐集報告(1)」山岳 33 の 1 別冊 昭和 13 年 26 頁
- 31) 鏡味完二 上掲書 上 164-168 頁
- 32) 金井典美『湿原祭祀』法政大学出版 昭和 52 年参照

- 33) 高谷重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版局 昭和 57 年 470-551 頁参照
- 34) 岩科小一郎『山岳語彙』昭和 15 年 評論社 12-23 頁

本小論は平成 7 年 4 月 15 日に川崎市国際交流センターで行なわれた、
第 14 回全国地名研究者大会の基調講演に加筆したものである。